

## 戦前の上海と日本人の印刷業 ——鹿内勲氏の自分史が語るもの——

孫安石

戦前の中国における活動を回顧した優れた伝記文学は数多く、さらに自分史などの自家版形式を借りて出版されたものを合わせればそれこそ膨大な数に上る。中国都市史（上海）を専門とする筆者もこれらの著作から多くのことを学ぶことができた。例えば、昨年、刊行した『東アジアの終戦記念日』（ちくま新書、2007年）を準備する段階でも、『李香蘭 私の半生』（新潮社、1987年）や堀田善衛『上海にて』（筑摩叢書、1969年）などを読み直しながら、1945年8月15日の敗戦前後の上海の激動を追体験することができた。その他にも、例えば、『滬城に時は流れて』（滬友会、1992年）は東亜同文書院の同窓生と関係者の回顧を、そして、『長江の流れと共に』（上海満鉄会、1980年）は上海の満鉄関係者の回顧をそれぞれ集めたものである。また、「在華紡」と総称される紡績業に関係者の回顧録などがあり、例えば、『西川秋次の思い出』（1964年）は戦後中国に残留し、中国紡織機器製造会社の設立に深くかかわった経緯などを述べている。これら自分史が語る戦前の日中関係の裏面史は、後世を生きる我々が文字記録だけでは掴みきれないきわめて貴重な情報を提供してくれることは言うまでもなからう。

そこで、今回は、戦前の上海における日本人が経営した印刷業の活動について記した鹿内勲氏の自分史「私の歩んだ道—人生80年の運、鈍、根」を紹介することにした。鹿内氏の自分史は、中国における日本の戦争が拡大されるにつれて、軍人の最たる楽しみの一つである煙草の包装印刷の仕事が増加し、日中戦争、そして、太平洋戦争へと共に海南島への印刷工場の進出が計画される様子を窺うことができる。

ただし、鹿内氏の自分史をより深く理解するために幾つか補足説明が必要な箇所がある。

まず、最初に鹿内氏が中国にわたったきっかけになった小平元氏について若干、ふれておく。

手元の資料によれば、小平氏は本籍が北海道の旭川市で、明治39年に商務印書館の社員として上海に渡ったが、1916年の金港堂と商務印書館の合弁を巡る利権争いに巻き込まれ、当時の退社する木本勝太郎と協力し、三井物産系統の支援を得、1917年5月に上海印刷株式会社を創立し、初代社長の小柴英代の没後は、森格一が社長になるが、その後、1930年から上海印刷株式の取締役社長を務め、1944年に上海精版印刷と合併した時にも取締役社長を務めた人物である。

小平氏の略歴については『中華全国中日実業家興信録』（昭和15年版）に下記のような記述が見られるが、その内容は鹿内氏の自分史の記録とはほぼ一致する内容である。

「同社（上海印刷会社）は資本金50万円の全額払込にて、本店及び工場を上海赫司克而路33号Aに有し、カレンダー、ポスター、レットルなどの彩色印刷を主要となし居れり。一時職工150名以上を擁し、当地同業を圧倒して、昭和4年上半年期の如きは利益金8万6千円、利益率3割4分、配当1割8分を行き居りしが、満州事変後の排日貨と一般市況の悪化に因り近年業績収縮しておりたる所今次事変の勃発に遭遇し、本社及び工場は灰燼に帰し、再起を危ぶまれるほどの痛撃を蒙れり、本人などは不撓不屈の精神を以て鋭意復興に努力し、昭和13年10月楊樹浦華盛路の合記印刷会社と合弁にて上海印刷会社を開設復興し、一方、赫司克而路の本社再建に着手し、現在、両工場とも操業するに至り最近業績を挙げつ

つあり」

また、上海印刷株式会社については、上海在留日本人の住所などを記録した金風社『邦人録』にもその掲載が確認できる（〔図1〕参照）。

〔図1〕によれば、1942年当時の職員は取締役社長小平元、常務取締役和田正世、取締役支配人鹿内勲のほか事務員11名、工務員12名、漢口工場4名の合計30名の陣容であったことが分る。

次は鹿内氏が本文中でふれている復興資金下付申請について若干、説明する。

満洲事変の勃発後に中国各地で展開された日貨排斥運動は、必然的に日本人居留民と中国の抗日団体との衝突をエスカレートさせるものであった。このような衝突を緩和させるために中国現地の日本の領事館は日本人の生活困窮者が本国（日本）の原籍地まで帰国するための旅費（船賃、汽車賃、食費など）を貸与することにし、中国現地における生活補助金として大人1ヶ月15ドル、小人1ヶ月10ドルを支給するなどの対策に乗り出した。上海地域を例にあげれば、1931年11月6日から12月までの間に合計1856名に対して総額28,660ドルが支払われたことが確認できている（「時局による生活困窮者補助に関する件」『満洲事変・在留民救済関係』、請求番号A-1-1-0-21-1-1-1、外務省外交史料館所蔵）。

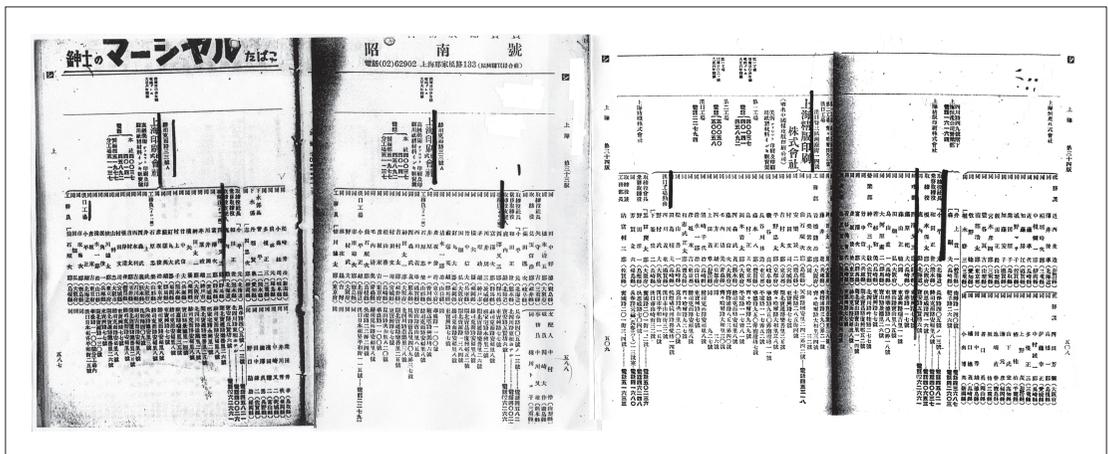
日本政府は、このような生活困窮者に対する補助金の貸与とは別に、中国現地における日本居留

民が経営する各種産業の復興のために資金を貸与する政策をも実行していた。上海など日本の経営資本が集中した地域における日貨排斥運動は、中国側の銀行が日本側の銀行や日本人に対する商取引を中止するという金融市場の封鎖を伴うものとして発展し、日本人経営の中小企業は、日本政府に低金利による復興資金の下付を請願することになる。

鹿内氏は満洲事変の勃発後の上海の状況を、「被害を蒙った邦人の中小企業会社は数十軒に上り、社長は毎日、日本人倶楽部に集り、その善後策として政府に復興資金下付申請の対策本部に当たりたるものの決定まで半年以上」と記しているが、この復興資金の請願については、実は外務省外交史料館に当時の関連資料（『満洲事変・被害関係・復興資金貸下関係』請求番号A-1-1-0-21-1-3）が現存している。

すなわち、上海の中小企業37社が加盟した「上海工業同志会」は、各工場の損害額をひとつ一つ積み上げ、次のように記している（〔図2〕を参照）。

「在上海邦人経営の各種工場に対しても其支那商取引先は各工場に対する契約を無条件に解除破約を為して製品の引取りを拒絶し、既に引取品は返送し甚だしきは受取商品に対する代金の支払を肯せざる者もあり（中略）資金は固定して融資欠乏し為に既に工場休業の余儀なきに至りたるもの



〔図1〕（出典：金風社編『邦人録』、左から第32版—1942年、第33版—1943年、第34版—1944年の順。第34版は上海印刷と上海精版印刷の合併による社名変更）

〔図2〕復興資金下付請願書に添付された損害額調査表の一部

店名	損害額	復興資金希望額
吉田屋	五五〇	五五〇
三記洋行	六六六	六六六
清和洋行	一〇〇〇	一〇〇〇
五福洋行	一〇〇〇	一〇〇〇
田記洋行	一〇〇〇	一〇〇〇
日新洋行	一〇〇〇	一〇〇〇
小津洋行	一〇〇〇	一〇〇〇
昭孝洋行	一〇〇〇	一〇〇〇
泰新洋行	一〇〇〇	一〇〇〇
大八洋行	一〇〇〇	一〇〇〇

(出典：『満洲事変・被害関係・復興資金貸下関係』請求番号 A-1-1-0-21-1-3)

続出」する状況を打開するために低利による資金の支援を請願する。上海印刷株式会社は、この上海工業同志会の加盟工場として名を連ねていたのである。

日本政府は、復興資金下付の請願運動に対し、資金を支援しないことになれば、「我が国民生活の繁栄に至大の関係ある対支経済発展の基礎を永久に失ひ、徒に他国人をして漁夫の利を収めしむるのみにして今次帝国非常の努力も遂に其の有終の美を濟さざるの結果」になるという観点から、「此の際、政府に於て資金を供給し以て、対支経済発展の鞏固たる地盤を築くと共に在支邦人企業の間統制を加え、我が内外企業の間強調を保つ機会を作る」ため1932年において1500万円を支出することを決めている。

この1500万円の支援は上海1000万円、その他500万円として策定され、貸付期間15年（5年据置、10年年賦）という条件であったが、これは1932年5月に村井上海総領事から外務省宛に提出されて復興資金希望額のほぼ全額が認められたことになる（〔表1〕を参照。中国各地の居留

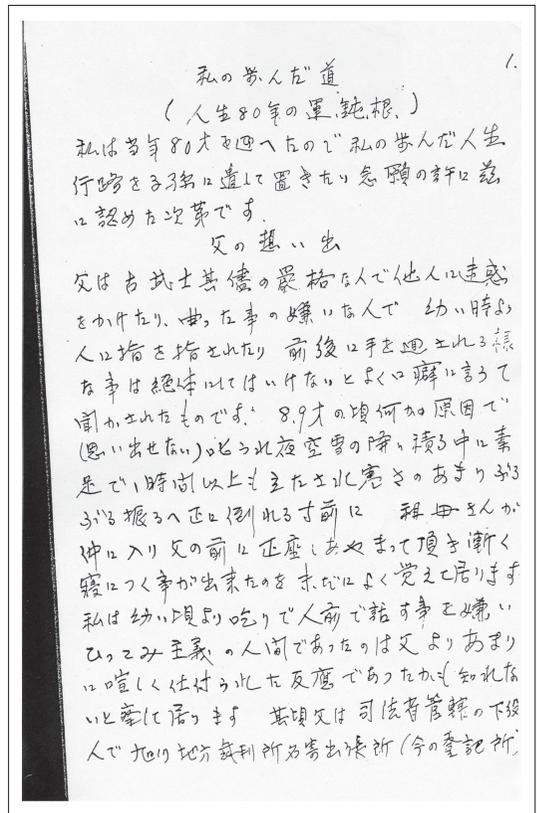
表1 上海の復興資金希望額

業種別	人員	資本額(円)	復興所要額(円)
貿易業	183	520万	380万
工業者	104	1353万	524万
小売業者	473	220万	90万
その他	198	120万	40万
合計	958	2213万	1034万

(出典：『満洲事変・被害関係・復興資金貸下関係』請求番号 A-1-1-0-21-1-3)

民の貸付状況については、通商局第2課作成『第64回帝国議会説明参考資料』、1932年12月、外務省外交史料館所蔵の「在支邦人事業復興資金に関する件」が詳しい。

以下、鹿内氏の「私の歩んだ道—人生80年の運、鈍、根」を載せるが、幾つかおこわりをす



〔図3〕手書きの原稿「私の歩んだ道—人生80年の運、鈍、根」

る。手書きの原稿には今の歴史用語として使用しない表現なども混在するが、本文のまま書き起こした（〔図3〕）。

また、文章の区切りになる部分にはアラビア数

字で通し番号をつけた。また、読みやすさを考え、父の思い出と母の思い出の部分は「父と母の思い出」に、北支、満洲への出張の部分は「北支、満洲への出張」と「青島と天津、そして、大連での印刷の注文」に、上海事変、満洲事変、日支事変、大東亜戦争、終戦迄の歩みの部分は「上海事変、満洲事変、日支事変と煙草の包装印刷」と「大東亜戦争、終戦迄の歩み—煙草の包装から儲備券紙幣の印刷へ」にそれぞれ構成を若干、変更した。原稿の入力作業には本学中国言語文化修士課程修了の佐々木恵子さんに手伝ってもらった。



【図4】上海日本人ゴルフ倶楽部（昭和12年6月9日、新公園、最後列左より8人目が鹿内勲氏）

最後に、鹿内氏の原稿と関連資料は元上海日本尋常高等小学校同窓会名簿幹事の甫喜山精治氏の提供によるものである。記して感謝したい。

## 私の歩んだ道—人生80年の運、鈍、根

鹿内勲

私は当年80才を迎えたので、私の歩んだ人生行路を子孫に遺して置きたい念願の許に茲に認めたい次第です。

### (1) 父と母の想い出

父は古武士そのままの厳格な人で他人に迷惑をかけたり、曲がった事の嫌いな人で、幼い時より人に指を指されたり、前後に手を廻される様な事は絶対にしてはいけないとよく口癖に言って聞かされたものです。8、9才の頃、何かの原因で（思

い出せない）叱られ、夜空雪の降り積もる中に素足で一時間以上も立たされ、寒さのあまりふるふる震え正に倒れる寸前に、祖母さんが仲に入り父の前に正座しあやまって頂き、漸く寝につく事が出来たのをいまだによく覚えております。私は幼い頃より吃りで人前で話す事を嫌い、ひっこみ主義の人間であったのは、父よりあまりに喧しく仕付けられた反応であったかも知れないと察して居ます。その頃、父は司法省管轄の下役人で旭川地方裁判所名寄出張所（今の登記所）が新設されるに当り、所長として任命されました。この登記所は広範囲に渡る地域を管轄して居り、その頃、現在ある北海道拓殖銀行は半官半民の銀行で開拓奨励のため、農家に低利の越冬資金を10ヶ年賦償還で貸付けて居り、その抵当権設定登記をした上で貸し出される事になって居ました。9月より12月迄はとても忙しく雇いの人も居ったのですが、手が廻らず毎日午後9時、10時頃までその日の処理をするため、残業を余儀なくして居ったものです。ある夜大変な事が起ったと云うのは終了の時よく火の気の点検を怠り、火鉢の火が残って居った上に椅子の布団が落ち、夜の12時頃赤々と硝子に反映して居るのを通りかかりの人が大声で知らせてくれ、大事に至らなかった訳で、その時姉が井戸のつるべより水を汲み上げるのに想像も付かない程の力を出して汲み上げ、リレー式に水を運び大事に至らなかった事を薄々覚えて居ります。

母は頑丈な体格の人で6人の子供を育て上げ、（私は3人目）其余暇に町の方々に裁縫や押絵の作り方を教えて居りました。学校より帰ると多勢の奥様連中が押絵を作って楽しんで居ったのをよく見受けました。夜は遅くまで裁縫等して、他人の着物を縫ったりして生計を助け、晩年は御詠歌のグループに入り、楽しんで居りました。

### (2) 支那（中国）に渡った動機

北海道拓殖銀行の方の紹介で旭川の公證人、小平元（後、独学で弁護士になる）労役場に書生としてお世話になる傍ら、英語を勉強しアメリカの伯父の処に行きたいと考え、英人の老婦人ミス・チャンドラ氏の許で勉強して居った時、偶々公證

人小平先生の御息が支那上海より久し振りで帰国なされた際、懇願して連行させて頂いたのが始まりでした。この方は日露戦争当時より日支合弁会社の「商務印書館」と云う処に日本資本家の代表として居られた方で日露戦勝後より大正の初期にかけて支那の政情不安に伴い各地で日貨排斥から邦人に対する暴動等が各地に起り、日本政府からは21ヶ条の条件を提出するに至り、余儀なく解散する事になり、支那側は商務印書館の名称を継承し、日本側は印刷部門の数十名の従業員をそのまま引継ぎ「上海印刷社」を設立した次第です。

### (3) 商務印書館の沿革

明治35、36年頃、桂内閣時代に教科書事件と云う小・中学校教科書に関連し、大事件が起きたそうです。当時、東京の金港堂書籍(株)社長と三井物産の上海支店長山本条太郎とは縁戚関係であったため、同氏の斡旋で支那全土に亘る教科書の編纂販売計画の許に日支合弁の会社を設立したのが、商務印書館でした。その後この会社は加速度的な発展を来し、支那随一の会社に発展しましたが、その後国情の相違から漸次日本人の干渉を敬遠する様になり、却って日貨排斥を煽動し、やむを得ず合併事業を解散するに至ったそうです。分離後は益々順調の一途を辿り、殊に日支事変当時は抗日の本部まで置かれ、現在超一流の出版会社として発展現存して居ると想われます。

### (4) 僭越ながら三井物産山本条太郎支店長の事

この御方は明治20年頃より三井物産に入社せられ出世された非常な努力家で外国で商取引をするには第一言葉がわからないと何をすることも出来ないと言う旨の許に自ら率先して英語、支那語を学ばれたお方だそうで、三井の常務になられ、格段の出世をなされたお方でした。ところが、海軍疑獄事件として有名なシーメンス事件に引っかかり退任されたのですが、その後、満鉄総裁や政界の重鎮として活躍されたお方です。山本条太郎支店長の秘書に森格さんと云う偉い方が居られ、上海印刷社の設立に当り、この方が殆ど支那側と折衝の任に当られ、漸く設立されたと聞き及んで居

ます。初代の上海印刷社長であられた為、この方の逸話を一寸記載させていただきます。

### (5) 森格さんのお話

森格さんは三井に勤務中、日露戦争が勃発し、ロシアは日本陸軍の旅順攻略の裏を欠くべく、バルチック艦隊をはるばる東洋にむかわせるにしてもスエズ運河は日英同盟に抵触し、通過出来ず、やむを得ずアフリカ南端の喜望峰を迂回し、印度洋、南支那海、東支那海を経て、ウラジオストックの東洋艦隊と合流し、日本海軍と対決する計画を察知し、流暢な支那語と特別の気概があった方であったため、支那人に変装し、ジャック船に乗り込み、バシー海峡よりフィリッピン、マレーシア方面にまで出かけ、バルチック艦隊の動静を監視し、対馬海峡を通過するか、津軽海峡を通るか、議論百出中、対馬海峡を通るに間違いなしと見届け其旨三井本社に報告し、日本海軍は島々の影に隠れ、バルチック艦隊が半ば対馬海峡を通過した機に日本海軍連合艦隊司令官東郷平八郎閣下は「皇国の興廢、この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」との口期を高々と揚げ、挟み撃ち作戦を以ってバルチック艦隊を全滅させ、日本海軍の大勝利を得た次第であると云うことは余り世間に知られていない逸話の持ち主である事が森格伝によく記載されて居ります。その後、天津支店長よりニューヨーク支店に廻り、退職されて政界入りし、二二六事件当時は政友会の幹事長であったそうです。

### (6) 上海印刷社の沿革

上海印刷社は創立当時、社長の外、工務担当の重役工場長、次長、印刷部、描写部(当時は写真製版設備なし)、写真部、原版部、活版部、組版部、鑄造部、姓本部、製版部の各主任の外は全部支那人を使用し、事務所の日本人は私と工務担当の青年の二人限りで、外に支那人の事務員数名の外に事務見習いの支那人2名(支那語でオサンツァー(オサンツァー事)と呼んで居りました)で支那人の顧客が主であったものですから、買弁にすべてを任せておりました。

この買弁は大きな取引になると主に芸者屋で晩

餐後、麻雀をしながら商売をし、昼は茶楼と云うて各方面の商売人が茶を飲みながら商売をする、と云う式でした。会社には毎日、規則正しく出勤せず、自分の腹心の者を数名置き、（これは会社の規則通り）電話一本で物事を処理し妾を数人抱え実に豪華な生活して居ったものです。妾を多く持って居れば居るほど顔がきいたと云う当時の支那の習わしでした。時折打ち合わせに朝来たり、昼、夕方来たり、不規則で自由な身柄でしたが、会社としては充分な注文があり、完全に収金され、収益を揚げられれば良いと云う考え方の様でした。

入社当時の1、2年間は言葉が解らず、ちんぷんかんぷんで実に閉口しましたが、見真似、聞真似、外人商社への使い歩きから、記帖、発送案内書は英文タイプライターを使い、5枚複写し、1枚は事務所の控、2通は先方へ、1通は発送部へ、1通は経理部へと云う具合に、一回タイプをたたけば、各部で処理できる次第で、時間の経済と正確を来した仕組でした。それで骨身を惜しまず何でも出来る事は進んで仕事を見い出してやったもので、自然、語学の習得や商習慣がわかる様になったものです。

上海印刷は当初より順調に発展し、主な得意先は大略し支那人顧客60%、外人商社20%、邦人商社20%の割合で順調な成績を挙げて居りましたが、次々に支那人間の動乱等が起り、続いて世界第一次戦争、第二次戦争と不安定な情勢に向かい、殊に第一次戦争後の大パニックでは、横浜の生糸問屋で280年間も続いた茂木物兵衛商店が倒産したり、神戸の鈴木商店の崩壊等、日本有数の会社が多数倒産した大不況時代にも拘わらず、印刷業は投機的な事業でなかったため、その不況時代をよく切り抜けられた次第です。

主に支那側の煙草の包装紙（日本の様に専売制度ではなかった）、独逸の大染料顔料会社、独逸の製薬会社Bayerが支那全土に亘る多量の宣伝物やレットル等の仕事があり、邦人関係では各紡績会社の綿布、綿糸のレットル、捺染関係のレットル等を一手に引き受け、安定した経営を継続して居った次第でした。

幸い三井物産関係の重役も居られたため各紡績

会社、例えば上海紡績、日華紡績、同興紡績、東華紡績等は三井関係の各社に居られた方が経営して居られた様でした。その他、日本内地に本社を有する鐘紡、東洋紡、大日本紡、内外棉会社、豊田紡、日清紡、長崎紡など紡績全盛時代で日本経済を左右して居った時代でしたから、極めて安定した有福な会社を独占的に得意先として居ったので、収益も高く、最高2割8分の配当をした事もあり、安定した経営の会社でした。

その頃、特記すべき事を茲に揚げます。

時は大正11年、12年頃関東大震災当時であったと思います。その頃はまだ自動車は普及されて居らず、抱え車（人力車）の全盛時代の出来事で、月末給料の現金を支那人事務員田換初に支那の取引銀行の浙江実業銀行（前記の森格さんや日本留学生出身の李銘さんの経営して居った銀行）に引き出しに抱え車に乗せてやっつての帰路と私の外出の往路と（復線電車路を挟んだ向側）偶然すれ違った途端に2人組の強盗が向かい側の支那人の事務員を襲い、掛り膝の上の現金包みを強奪し、逃げる所を目撃したので、私は無我夢中で車より飛び降り、その強盗を追いかけ、現金を奪回した時、他の一人より逃亡しながらピストルを2発発射され、奇跡的にも外れ初めて危険である事を知り、それ以上追跡せず、現金束をむき出しに抱え会社に取り敢えず帰ることにしたものの、今度は自分自身が襲われぬかと初めて危険を感じる様になって居った処に数名の警官が来て本署に出頭し、顛末報告手続きをした次第です。

一方、支那人事務員は余りにも突然の出来事でただ啞然として失神状態に陥り、しょぼしょぼ会社に帰ってきたときは失神状態そのままの姿であったそうでしたが、私は警察より電話報告してあった為、別に疑われること無く災難として処理されました。私も若しその強盗がピストルを持って居ると云う事を最初から知っていたら恐らく危険を犯してまで強盗を追跡する勇気がなかったかも知れない、とその当時の恐ろしさを推察して居ます。

上海に於いてはコソ泥、強盗等は頻繁にありましたが、ピストルを持った強盗はこれが初めてでした。この時、会社より功労賞として\$350、-

(現在の約 200 万円) の報奨金を貰いましてホクホクでした。

### (7) 結婚の話

海外に勤務する会社員は 3 年に 1 度 1 ヶ月の休暇と親元まで往復する旅費、給料を支給するのが一般の習慣になって居り、2 度目の休暇の時、上海より神戸に上陸し、大垣の伯父の処、宇都宮の伯父は宇都宮地方裁判所の監督判事をして居ったので立寄り郷里、弘前の伯父の処より北海道へと向かうのですが、今は移転し名寄登記所の所長を定年前に辞転し北見の上湧別町に新たに開設された登記所の北海道殖産銀行の指定代書人になって居った処まで行き、二週間位ぶらぶらして居った時、大垣の伯父より弘前の親類の次女を貰ったらと云う手紙が来り、帰路弘前に立ち寄り話が出た訳ですが、私は既に 29 才になって居たものの何も支度をして居ないし出しぬけに連れて行っても差し当たり居住にも困るので、との理由で断った処、伯父は今此足で連れて行くなら娘をやるが、来年改めて来ると云うなら断るといふ返事であったためやむを得ず中止し帰る途中、青森に居った友人にその旨を話したる処、この際連れて行けばどうにかなるから是非連れて行け、と盛に薦められたので、それならと云うて又弘前に引き返し、休暇の期限を延長して貰い、結婚後 3 日目に同伴し、上海に帰社した訳で超スピードの新婚旅行をした事で、上海印刷の社長宅に 2 週間位又々で厄介になり、新婚の居宅を構えたのが大正 15 年 11 月の事でした。

### (8) 北支、満州への出張

大正天皇は大正 15 年 12 月 25 日崩御され、翌日より昭和元年となった次第です。支那内地の内乱が次々と起り、その都度居留民はおびやかされたり、根強い抗日、排日貨の暴動が頻繁に起り、次から次へと不況の嵐が吹き廻り、昭和 3、4 年頃は不況のどん底で大学を卒業しても就職口なくて工場の作業員になったり、臨時工として働かなければならないと云う大不況時になったばかりでなく、内外地の資金は凍結され貿易は全面的にストップする状態に陥り、政府はモラトリアムと云

う法令をだし、日本は自滅する寸前にまで追い込まれておりました。

従ってそれ迄 60% 位含めていた支那人顧客がどんどん減り、外人と日本人紡績関係だけでは経営困難を感じる様になったので、北支、満州方面に手を延ばす抗張計画を建て、私単身出張することになり、船で青島へ出発する事にしました。

青島は第一次欧州大戦当時、独逸が租借して居った青島を日本が連合国の一員として攻撃すべく出兵した処で、膠州湾に面し上海と違い海水は実に清く、気候も良く果物、野菜、落花生が豊富に獲れる処として有名な処で、日本紡績会社は上海に次ぐ工場を建設して居り、同興紡績を初め大日本紡績、東洋紡績、長崎紡績は上海と比べ、低賃金で職工を雇傭する事が出来た為、続々と工場を新設し、印刷物は上海より供給して居った関係もあり、挨拶傍ら視察と云う名目で出張した事と小平社長の知人が「青島新報社」の社長をして居られたので、その方の宅に滞在させて頂き、数日間紡績廻りをしました。

非常に景色の良い処で緑の山と紺碧の膠州湾に面した山並みの中腹には赤煉瓦造りの独軍司令官ワルデック将軍の邸宅があったので、景色の調和がとれた実に良い眺望で印象的でありました。又、中腹には日本軍が掘った塹壕の中に血痕の落書きが残って居り、その当時が偲ばれました。独逸人はその昔こんなよい処をよくも獲得されたものだと感心した次第でした。

何しろ上海は揚子江の濁流を眺め一望千里山なし殺風景な処より来たものですから、見るもの、聞くもの、食べるもの満点に住むなら青島と呼ばれて居った事を思い出されましたが、実際永く住んで居られる方の話によると空気が乾燥しすぎているので、胸の病気に犯され易いと話されたことを聴いて居ります。また、湛山という海水浴場があり、夏季上海より外人の避暑地として有名な処で上海印刷では外人の Millington と云う広告会社より Tsingtao Edge Water と云う 6 色刷のポスターを印刷した事を思い出しました。労山という岬の山は関西の六甲山の湧水の様に水が冷たく、清涼飲料水として市販されて居りました。アサヒビール会社は青島ビール会社と云う子会社を経営

して居り、ビールのレットルの注文を受け、ビール製造の工程をも見学させて頂き、青島での出張効果を挙げました。

#### (9) 青島と天津、そして、大連での印刷の注文

青島は山東半島の岬にあるのですが、山東省は果物（ぶどう）、野菜（白菜）、青島葱としてすき焼きになくてはならない太い白根が長くて青島牛肉鍋として珍重されて居りました。落花生がよく取れ（砂地のため）、所謂ピーナッツの植え付けられて居る処を初めて見て珍しかった事を憶いて居ります。馬齢薯は地上で花が咲き、土の中で成育の薯となりますが、ピーナッツの花は土の中にもぐり人の見られない処で実をむすぶのだそうで、ロッキード事件のピーナッツ領収書と云う言葉が出て居るらしいです。青島に来て初めてタクシーに乗った時、独逸式の右側通行（上海は英国式の左側通行）なので対面より来る車と衝突しないかとびくびくしたものです。

青島より天津まで大連汽船会社（大阪商船の子会社）の船客となり、渤海湾の西北に当る天津へは白河と云う河の河口から99曲がり曲がって天津港に到着しました。ここは仏蘭西租界の外には日本租界もあり、秩序整然とした町の様でした。カラザスと云うロシア人経営の煙草会社があり、紹介なしで出しぬけにカレンダーの注文を貰ったと云う事がありました。それは上海は支那に於ける流行の発祥地で流行の先端を切った支那美人絵の仕入れカレンダーの見本帖を持って行ったため、とても気に入られ、何万枚かの注文を貰った次第でした。

一両日滞在して北京を見物したくて汽車で北京駅に到着しました処、此日はとても風が強く、遠くのごび砂漠より飛来した黄塵方丈の砂煙が空一面覆われて居りましたが、楊貴妃の居られた万寿山の昆明湖の石舫（石の船）を見たり、西太后しか通らなかった頤和園の長廊で生海老（皮をむいてもびくびく動いていた）を食べたりした記憶が残って居ります。また、広々とした天壇、紫禁城等を見物しましたが、万里の長城は2年連続して旅行しましたが、次回に仕様と思って遂足を延ばさなかったのが今更残念に思っています。

次は天津港より満鉄王国の本社があった大連に向かった処で、港は不凍港で水は清く埠頭についてランチ（ハシケ船で船を岸壁に横付けたり、出航の時舳口ロープを付けて引く船）の大きさに驚きました。上海港は揚子江の支流黄浦江を遡った川の港ですが、大連は渤海湾に面した処なので、ハシケ船が30メートル、40メートルもある大きい船なのにびくびく仰天した訳です。旭硝子会社の経営する昌光硝子会社と云う会社があり、小平社長よりの紹介状で支店長をして居った牧浦愛司氏と云う方は東亜同文書院出身の方で小平社長と泥懇であったためよく面倒を見て貰ったり、ご馳走になったりして此の上ない次第でカレンダーの注文を貰ってホクホクでした。

大連より車で1時間たらず離れた処に旅順口があり、近くに203高地と云う日露戦争の激戦地で203尺の小高い丘でしたが、日本軍は正面向かってどうしても撃退させる事が出来なかったため、この丘の麓よりトンネル式の塹壕を掘り爆発して漸く陥落したと云う有名な古戦場を見学したり、又奉天に向かう途中に金州と云う処があり、ここも激戦地であった古戦場で、此地に上海内外棉会社（紡績）の分工場があり、上海より綿布のレットルを供給して居った関係もあり挨拶に赴いたときは午後1時頃で用度課長に面接を求めた処、一寸待って貰いたいと応接室で待って居ったのですが、なかなか出て来られないので、待ちくたびれて帰ろうかと思つて居った処、午後二時頃やっと来られ、昼休みにテニスをして居ったので、失礼しましたと言つて来られたので、一寸あきれましたが、其反面それだけ余裕のあった会社で注文を貰って帰りました。ここ金州一帯に林檎が植え付けられ秋口にはとても美味しい大きな林檎がどっさり収穫されて見事なそうです。日露戦争後、青森県から技師が来られ苗を移植した事と気候が適して居るので、立派に成長したと行って居られ大きな木になって居りました。此金州より善蘭店あたり迄林檎の名産地となって居りました。奉天までの間に熊岳城と云う処があり、大陸には殆ど地震が無いせい、温泉が見受けられないのですが、ただ一つ煙の中に温泉が湧き出てる小屋があって開放されて居ると云う話なので、その温泉に

つかってよい気分になって居った処、出会った人から時々近くの千山より匪賊が出没すると言う話を聞き、早々引き揚げ、次は奉天に向かう事にしました。満鉄の汽車は広軌鉄道で、世界で一番幅の広い鉄道でして、日本の狭軌と比較にならない程広くゆったりしており、大連より奉天、長春（新京）哈爾濱、齊々哈爾を経て満州里でソ連の東支鉄道と合流しモスクワを通じて居ります。奉天に於いては馬賊の大御所張作霖の本拠北大営や新興計画中の町を見物し有名な撫順炭鉱に向かい、驚いた事に道路から側の石ころまで真黒い石炭がころがっていて、黒一色の町でオイルセールと云って石を粉砕して油を採って居った工場を見学し、目新しい光景を見る事が出来ました。次は長春ですが、満州国建国後、新京と改称し新興土地計画の真最中で満州の首都として政治、経済、文教の中心とする設計の許に（昭和6、7年頃）伯父の福士末之助氏が満州国文部省の学務部長をして居られました。伯父は元朝鮮総督府総督の斎藤実閣下の下で政務長官をして居られた元の大阪市長中井四郎氏の部下で大阪市学務部長をして居られ所望されて朝鮮に同伴され、その後、満州国文部省の学務部長に転じられ、未だ旅館に一人生活をして居られた、この伯父が大阪市学務部長当時、私の家内が弘前より来阪し、家事見習として三ヶ月程厄介になった事もあるし、私も義理の伯父である事より挨拶に伺い、名詞を通じた処1室にとじこもり、種々書籍を広げ、盛に文案中で非常に多忙そうで、明朝の重要会議に発表する文案中なので、残念ながらゆっくり話をする暇がないので、2、3回はゆっくり宿泊して貰いたいの事でしたが、私は出張の途中一寸の暇を利用しての旅行のため、今晚限りで明朝は大連に帰らなければならないとの事で別れた事がありました。その時、人生訓を教えられた事は人の家を訪問する時は前以て要件を言って差支へあるかないかを確かめの上、訪問するものだと申されました。しかし、当方としては出張中の思いつきなのでそんな時間の余裕がなかった訳で一時的に障りましたが、冷静に考えると程よい教訓を言ってくれたと感謝した次第でした。

#### (10) 上海事変、満州事変、日支戦争と煙草の包装印刷

以上の様な具合で、2ヵ年連続して北支より満州に出張旅行をしたものの排日運動は一向に止む事なく益々支那全土に亘り拡大し在支日本人居留民は自滅する寸前にまで追い込まれた矢先北支盧溝橋に於いて爆発の突発事故が起因し満州事変になった次第でした。その後上海においても様々な不詳事件が起り、最も大なるものは「五三〇事件」と云って日本人は元より外人にまで食料其他一切品を売らないと云う暴動に変わり、強いては邦人の学生に迄危害を加えると云う事件が頻繁に起り、そのため日本海軍陸戦隊の護衛の許に通学せねばならぬと云う時代で居留民の不安一層高まり、結局家族を一時強制的に内地に帰還させねばならぬと云う事態にまで逼迫したので、家内は3人の子供を連れて神戸に上陸し、大阪より裏日本を直行し弘前の実家に立ち寄り、北海道の北見上涌別の父母の許に約1年足らず帰国させることに致しました。

一方、上海に於いては益々日貨排斥より日貨不買の暴動に代り所謂上海事変となり、上海印刷は共同租界の延長拡張地に於いた赫司克而路と云う処に於いたため暴徒に襲われ全焼し、黒煙猛々と長時間に亘り、燃え上る様子を避難先の常盤旅館の屋上より社長と共に眺められたものの其現場に行くこともできず、ただ猛々たる黒煙を見るばかりで意気消沈、甚悲庸たるや言語に表す事できず、只々茫然として其時各所で被害を蒙った邦人の中小企業会社は数十軒に上り、社長は毎日、日本人倶楽部に集り、その善後策として政府に復興資金下附申請の対策本部に当りたるものの決定まで半年以上もかかる間只茫然と日を送るのに忍ばず、私は日本海軍陸戦隊の警備区域内にある被害を免れた支那人工場を借り受け、時機に応じた印刷をすべく社長に進言したも社長は当時還暦を経過し消極的な考えを主張して止まなかったので、私個人でそれを実行すべく支那人工場の持主、宝塔印刷所（オフセット機3台）を借り受ける交渉が幸運にも決定したので広い工場の3階は私一人留守番方々泊まり込んだ次第でした。その頃は暴動による迫撃砲と云って遠方より所きらわ

ず、投下爆発し、10メートル四方位爆破するのが一番恐ろしく、只々運を典に任せ寝に付いた次第です。当時、この家には幽霊が出るという噂が立って居りましたが、死線を越える真剣の決意であったため、一向に其恐ろしさを気に留めず、ローソクの光で半月程過ごし整備に当たりました。

一方、日本陸軍は海軍陸戦隊を応援のため青島方面より上海に向かい愈々陸軍が上海に上陸すると云うことになれば、本格的の戦争に追い込まれると云うので居留民は嬉しいやら前途の不安等一層募り本格的戦争にならなければよいが、と懸念して皆と話をして居る中に愈々上陸の確報に接し、大急ぎで歓迎の日の丸小旗を印刷する事になり旗竿を付ける作業迄各町内会の応援を得て日の暮れるのを知らなかった次第です。この時上海市内に最後の一人になる迄踏み留ると云う堅い意志の許に残留した人は約1千人位でした（各紡績は市内より遠隔の処にあったので別です）。この機に乗じ私は単独行動に走るか社長と共に利を捨て義に準ずるかの岐路に達し、随分迷った訳でしたが、上海に渡航から結婚に至るまで永い間一方ならぬお世話になった義理に遡る事は人としての道に反する事を痛切に感じ、社長と膝を交えて相談の結果、会社として復興の第一歩をスタートする事に一決した訳でした。

その中に復興資金の方も案外早く下附されるとの情報に接し、本格的に会社を建て直す復興にとりかかり、社長と最も親交の深かった同興紡績会社社長、光川團三氏と懇談の結果、前記の森恪事務所上海支店長の和田正世氏（森恪事務所の元江西省桃中鉞山の探鉱権を得て八幡製作所に納入して居った和田氏は元三井物産漢口支店に居られ、森恪事務所青島支店長より上海支店長になられた方）を専務に迎え焼失した工場跡に3階建の鉄筋本社及び工場を建設する段取りとなり經理課長に西沢又三郎氏（和田専務が連れてこられた方）と云う陣容の許に始めました。昭和八年頃であったと思います。

復興計画に当りては東京の大日本印刷の社長佐久間長四郎氏の応援を得て、機械の設備、営業部員の陣容を固め、私は常務として本格的に活動を開始した次第です。其間陸軍の上陸作戦は日に増

し拡大して、上海河口の呉淞<sup>ウーソン</sup>に上陸し、（上海は揚子江の支流黄浦江を80哩（128キロ）遡った処にあり）進んで廟行鎮の肉弾三勇士の激戦、杭州作戦（上海南方寧波より錢塘江の上流杭州）との挟み撃ち作戦等により大部隊の上陸に伴う兵站部の物資供給等とはとても内地よりの輸送が間に合わず、混沌たる状態でありました。

東洋葉煙草社は軍の命令により現地で専売局より専門の技師を招聘し、煙草の製造を開始する準備の真最中で、その包装紙を印刷する照会があり、最初に百花（Flower）と云う5色刷の美人絵の包装紙を印刷する事になり、一日平均5万枚（毎日）の注文があり、印刷中にどんどん増加し、一方皇軍は次から次へと上陸したため、其需要に応じられず、毎日10万枚から20万枚、30万枚、50万枚、80万枚と云う莫大な注文になったため、賃借して居った宝塔印刷所では間に合わず、占領域内の支那人工場を物色中、計らずも済々哈爾路と云う遠隔の紡績地帯にオフセット印刷機10台を有する合記橡皮印刷会社と云う処がありましたが、我軍の占領地域内のため支那人が勝手に操業することが出来ず、其儘放置して居ると諸設備の破損、紛失等の心配もあり、困惑して居ると云う事を聴き、元買弁をして居った支那人を通じ交渉したる処、小平社長は以前商務印書館より分離した上海印刷を経営して居る事実をよく承知居ったため渋滞することなく、合弁事業が成立し、上海印刷管理工場として発足した次第です。経営の分担は、上海印刷側は経営と金融を、合記印刷側は工場の設備の提供と工場の運営（邦人は応召で出征して居らぬ）をそれぞれ担当し、利益は折半と云う契約の許に発足（毎月計算）しました。私は常務として本社とこの工場の支配権を握り、毎日一度は合弁工場にも出掛ける傍ら東洋葉煙草（その後中華煙草会社と改称）の事務所（英租界）及製造工場（華徳路）自動車で約45分離れている）と実に目まぐるしい活動をせねばならない毎日でした。それに煙草製造工場に行けば、専売局より派遣された技師等各部門に居りましたが支那語がわからず、操業に支障をきたすと云う状態で私が行くのを待って通訳を頼まれ、あちらからもこちらからも引っ張りだこで往生しま

した。工場長は安恒さんと申され、東大工学部出身の局長級の方で京都専売局より派遣され、新製品はアメリカのバージニアの葉煙草を何パーセント、印度産の葉、中国産を何パーセントと Mix する割合によって味が違うとあって盛んに煙草を勧められたものでしたが、私は先年死線を越える大病をした折、煙草を止めたため猫に小判という有様でただ香を嗅ぐだけでした。

百花の次の新製品の図案を合記印刷の朱鴻儀社長に依頼し、Compass（指南牌）All Six（双方牌）Marshal（將軍牌）の高級品の図案が採用され、次から次へと出荷されました。以上の中の All Six と Marshal はケース入れのため、製缶工場豊泰製缶廠をも合記印刷と同様、管理工場として経営した次第です。このような状態で日支事変勃発、即ち昭和 11 年より昭和 13 年の春まで続き、南京攻略までを区切りにそれ以上進撃するかどうか、参謀本部に於いて激論審議されたそうですが、結局、進撃続行する事に決し、揚子江を遡り、九江より漢口攻略戦と化し、昭和 13 年春、漢口を占領し、四川省の重慶を目標に進撃せねばならぬ羽目になり、自然、煙草の供給も増加し、結局、漢口にも分工場を設置せねばならなくなり、東洋煙草の前田支店長と私が調査に漢口に赴く事になりました。

揚子江の両岸より日本の船舶を目指して、便衣隊より頻繁に砲撃があるため、昼間停泊し夜間のみ航行し、上海より漢口まで二日半位で遡江できる処を 1 週間もかかり、漸く漢口に到着し、陸軍の協力を得て英租界の紡績工場跡に工場を設置する目標を付けて、一旦上海に帰り、其の後飛行機で往来できる様になり、一ヶ月に 2 回位往復し、オフセット機 10 台を輸送し、開設することが出来ました。その当時の飛行機はダグラス D14 型といい、12 人乗りより 18 人乗り、24 人乗りとだんだん大きくなりました。最初に乗るときは保険金を付けたものの、非常に恐ろしかった。若し事故でも起きれば死ねばもろ共応召されて戦死すると覚悟して乗ったものでした。

何十回も乗って居る中に一番恐ろしかった事を次に記述します。漢口より上海に向かう途中（当時はよく敵機に追撃された事がたびたびあった）

操縦士が客席に揚げてある地図を何回も見に来てこそ二人で話しをして居るのをみて乗客一同は不思議に思って、それぞれ思い思いの想像を逞しくしました。敵機に襲われて居るのだ、敵弾に命中すれば直ちに墜落するし、どうにもこうにも逃げる訳にも行かず、覚悟するより他に道なし等と考えている中にだんだんと降下して、地上 1 千メートルより 500 米、200 米と下りてぐるぐる廻るのでエンジンに故障か、それとも敵機に襲われ避難地点を探して居るのか、その瞬間色々なことが頭に浮かび、実に恐ろしかった。其中、軍の飛行機が田園の中に不時着して居る機体が目に付き、どんな状態かを確かめるためであった事と判り、初めて安心して南京に到着しました。また、ある時は安慶（南京と九江の中間軍用飛行場）に着陸する際、道端の小樹に片翼をぶつけ、機体が急に横転し、墜落寸前の時操縦士が急に上げ舵を取り、機体を整えて着陸したときも肝をつぶし、一瞬身の毛が素立った事もありました。以上の様な状態で昭和 13 年、14 年、16 年までの間、毎日、目の廻る多忙の中に月日が立ち、絶対に日本が勝利するという観念の許に最後の一人になる迄、軍、官、民一丸となって戦い抜くという精神であったため、直接軍隊に籍を置かなかったが、軍事体制下の日常と変わらない生活が続け、治安も安定してきたので、家族を 13 年に北海道より呼び寄せ、上海の土に成る覚悟で過ごしました。

#### （12）大東亜戦争、終戦迄の歩み—煙草の包装から儲備券紙幣の印刷へ

昭和 16 年 12 月愈々大東亜戦争と化し、本格的持続戦に追い込まれた次第で、陸軍は重慶を目指し進撃の一路を辿るし、海軍はマレーシアからダカルカナル、レイテ島、ラバール作戦の機を即応する補給の見通しを建てるため、三井物産は海南島に煙草製造工場を設置することになり、そのレットルを上海より供給して居っては間に合わないで当地に印刷工場を設置する様、上海印刷に一時も早く進出する様、命令が下りたるため、私は海軍将校待遇の囑託となり、急に出発することに決まり、香港経由の軍用機で出発し、香港で二日ほど滞在し、海南島の北端海口に向かいました。

海口は遠浅の開港場で支那の雷州半島と目と鼻の処にあり、支那本土とはジャンクで往来して居る処で三井物産は此地に小規模ながら煙草製造を開始したばかりの時でした。上海の工場と比較すると雲泥の差があり、女工の能率にしても格段の差があり、上海程度まで養成するには容易な事ではないと痛感しました。三井物産に出頭すると、よくここまで来られましたね、と驚いておられ、海軍はレイテ島、ラバール戦で同地を放棄せざるを得ず、サイパン島の戦闘中で已に山本五十六総司令官は戦死し、海軍の旗色が悪く、毎日空高く日本の戦闘機が雁行して南下する様々を見上げ非常な苦戦ですでに関が原が終わり、大阪夏の陣になんなんとする有様を目のあたり見、とても茲に工場設置どころの話ではないので見切りをつけて一時も早く上海に帰る様にしなさいと支店長より勧告を受けた次第です。海口は前述の通り、海南島の北端にあり、海軍の南方基地は南端の榆林及隣接の三亜にあるので其地まで軍のトラックが今なら毎日往来しているので、それに便乗して当地で待機の船団に乗る様にしなさいとの話であったので、直ちに軍のトラックに乗せられ、朝、海口を出発し、其日の夕方榆林に到着しました。

日本の有数な会社は各所に開拓村を作り、明治維新当時の北海道開拓屯田兵村の感があり、武田薬品や鐘紡、西松組と云う建設会社は全島に亘って活躍して居ました。海口は砂漠の中の町という感じで、町を廻ってみた処、勝間田氏の記念碑があり、聞くところによると、明治の中頃に横浜の外人商社に雇われて居った勝間田氏が此地に来られ、生物を収集し剥製にして横浜に送り、英国ロンドンの博物館に納めて居った其功績を称えた碑文でありました。三井の支店長の話では、或る日本の旅行者がロンドンの博物館で様々な陳列物を見て居った時、或る剥製に刻まれてあったカツマタと云うイニシャルがあり、この名前は確か日本人であるに違いないと云って内地に帰り種種取り調べたところ、静岡県の方である事が解ったそうでした。また、魚釣りの竿に遣うテグス糸は此地の特産で虫の脊筋の繊維だそうです。

海口より、榆林について驚いた事は三越が此地にデパートを開設し、女店員50名位居りまし

た。また、南方シンガポール、マレーシア、サイゴン、ビルマ、ハノイ方面より日本の戦局危うしと、政府より引き揚げ勧告を受け、ここ榆林に集結し、多数の邦人家族が船団を組んでは日本に引き揚げ、待機者で満員泊まる処もなかったのですが、当局の斡旋で漸く、宿を取ることが出来ました。三亜の軍港は南方作戦基地だけあって、立派な軍港でした。紺碧の広々とした海原を生まれて初めてあんな雄大な海景色を見ました。早速、海軍囑託である事を示し、上海までの飛行機か船に是非便乗させて貰いたいと懇願した処、荷物ならどんな重いものでもお引き受けしますが、人命だけはお預かり兼る、と断られました。根気よく日参の結果、香港まで行く鉄鉾船があるからそれに乗せてやろうと云う事になり、海南島の接岸を夜間航行し、ほんの僅かな処を二日もかかりやっと香港に着くことができました。榆林は昔日露戦争当時、ロシアのバルチック艦隊が南アフリカの喜望峰、インド洋を経てウラジオストックに向かう途中此地に寄航し、物資、食料を補給するため寄航したと云う話のある処で、島より3、4メートル離れない中に急に岸壁の様に深くなり、船を横付けると板一枚渡すだけで上陸できるという処なので、驚きました。三亜の軍港も同様に申し分なく、昭和十五年の2600年記念の宮中祝宴にはこの沖合いより同じ大きさの鯛を何千匹と取り空輸して供えたと云う話を聞き、なるほどと感心しました。

三亜で船待ちをして居った時、西方に北黎と云う処があり、此地は全山赤い山肌が現れている鉄鉾の山で軍が三亜まで鉄道を架設し八幡製鉄所に鉄鉾を積出して居ったので、其鉄山に行ってみると、軍の斡旋で赴く事が出来ました。先年満州の撫順に赴いた時、道端の土が全部真っ黒い石炭であったと同様、赤い鉄鉾石が露出して居り、其保有鉄分95%という良質の鉄山で揚子江の九江と漢口の間にある大冶の鉄山(75%)より遥かに有望視されて居った次第で、当時、海南島は宝島と呼ばれ、又海賊島とも呼ばれ、其海賊の頭首は日本の女性であるとも言われ、山奥には雪男ならぬ黒い人間の様に立って歩く怪物が住んで居るとも伝えられていました。面積は九州と四国とあわせ

た位の島だそうです。香港まで乗せて貰った軍用船が其後上海に寄航し、事務長より聞いた処によると榆林に待機中の船団 20 数艘は海軍の駆逐艦前後に護衛され台湾の高雄に向かう途中、南支那海の真ん中で敵艦の襲撃を受け全艦諸共死亡したとの話を聞き、幸運にも命拾いしたと感謝の意に耐えませんでした。

香港より広東（広州）に渡り、上海までの飛行機に便乗依頼した処、現役の将校が優先で囑託は後回しと言われ、丸々ヶ月間は毎日トランクをぶらさげて朝早く遠方の飛行場まで日参し今日もだめ、明日もだめとすごすご帰る次第でしたが、ある日現役の将校が急用の為、取り消されたので許されて乗った処、青天井で覆いがなく操縦士と機関銃士と私と三人だけで台北に向かうも台北で降ろされるかと思つて居った処、このまま上海へ向かうから又乗れとの許可が下り、一気に上海の江湾飛行場に無事着陸することが出来ました。着陸数分前より素敵に大きな入道雲が空一面に広がり、暗黒に向かってくるのを眼の前に見て無事着陸した次第で、若し数分遅れあの入道雲の中に巻き込まれて居たらひとたまりもなく墜落させられる処で、ここでも命拾いましたのは昭和 19 年 8 月頃でした。昭和 19 年の 3 月より半年位の視察で海軍南方戦線の旗色の最も悪い時期でサイパン島激戦の結果、放棄せねばならぬ時でありました。

江湾飛行場に到着して早々会社に電話したる処、出張以来 1、2 度通信したものの手紙は到着せず、どうなっているかととても心配して居った矢先なので皆びっくり仰天し、無事帰還した事を祝福してくれた一方、家族も半年の間何回も電話で様子を伺ったが、音信不通で分からず半ば諦め神佛に祈って居った矢先突然元気で帰宅したので一同喜んで夕食に花を咲かせたものでした。其時、長男は青森で海軍兵学校の試験を受ける為、船での帰国はとても危険と云う訳で海軍の軍用機で福岡の雁の巣飛行場まで便乗させて頂き、郷里弘前の家内の実家に泊まり、青森試験場に赴いたという話でした。海兵の試験は不合格者はどンドン振り落とされ、最後まで残り服の寸法やら帽子の寸法まで計り、後は身元調査と云う処で終わったの

で本人は合格したものとすっかり気をよくし、一路神戸まで来たものの、上海までの海路の旅は危険で不可能の状態でも門司より朝鮮釜山に渡り、朝鮮を縦断し鴨緑江を渡り奉天より北京、天津を経て、浦口より揚子江を渡り、南京に到着、駅のホームで一晩明かし上海に到着したのは私が帰国後、数日後でした。これは昭和 19 年 8 月末頃でした。戦局は愈々峻烈を極めサイパン島よりグアム島、台湾防衛、時折内地で B29 号による爆撃等ありたるもの上海は国際都市であったため、それ等の心配はあまりなかったものの、防火、防空壕への非難訓練等の有様でした。

上海印刷会社と精版印刷出版社上海工場とは紙、材料、油、其の他諸物資統合の関係上、興亜院（大東亜戦争中に出来た省）よりの命令で昭和 18 年 9 月合併し、上海精版印刷所（株）となり英米煙草会社（British American Tobacco Co., Ltd.）と云う世界有数の会社で煙草製造から包装紙の印刷まで一貫作業して居った会社で Three Castle, Navy Cut, Capstan, Ruby Queen, Chewwen, Pirate, Hatawen, 等の煙草を支那全土に販売して居った、その最新印刷工場を管理することになり、また、中支那に於ける通貨である儲備券紙幣を印刷する事になりました。しかし、上海は接岸地で危険を伴うので、北支の山東省済南にあった広大な紡績工場跡に全部の機械を一時も早く移送し、専門に通貨幣印刷に従事する様、総司令部より命令があり、輸送其の他に要する材料、資材、諸掛りは全部軍部より支給される事になり、即刻其準備に取りかかる事になり、私は南京総司令部に日参し輸送計画の折衝に当り、毎日目まぐるしい日を送り、輸送貨車に宰領者（輸送責任者）を一名宛付け南京向け発車し、揚子江を渡り浦江より津浦鉄道で一路済南に一週間位かかり到着した様でした。

戦争中上海に居残った者は国家の非常時に第一線に出て戦闘は従事しなかったものの、最後の一人になるまで国のために戦い抜く、と云う確固たる覚悟が出来て居った為、社員の中には最初は済南に移住する事を非難する言葉もあったものの、退職して内地に帰る事も出来ない情勢に陥って居たため自然服従してくれて、社員一同、一心同

体となって立ち働いた事に感謝して居ります。それで昭和20年8月までに予定の機械及び物資の移動が終わり、8月15日に愈々上海精版印刷公司済南工場の開場式典がある日に天皇陛下より終戦の紹勅が発せられ、戦争も終焉した次第で、私は上海の後かたづけをした上で、済南に向かう事にして居ったので上海に止まって居った次第でした。

その後、支那側に接収される事務引継ぎは私人責任者となり、昭和20年12月31日まで支那側の食事を共にし、引継ぎ業務を終了した次第です。昭和21年4月15日に集結地区別の引き揚げ船で博多に上陸し、一路、青森県弘前市の家内の実家に一時泊まり、其の後、単身札幌進駐軍司令部将校宿舎（Grand Hotel）に通訳として3年間勤め、前記の上海精版印刷会社常務取締役技師長榎本保太郎氏の招きにより大阪に移住し、大和印刷会社の創設に当り、昭和53年満80歳になったのを機会に同年七月末に退職した次第です。